

式文

ただ今ここに故○○○会長の御霊を迎え葬送の式を行うに当たり、式文を奏し、心より哀悼の意を捧げるものでございます。

おもえば、前夜まで私どもとにこやかに談笑しておられたあの○○○会長が、かくも忽然として他界されたとは、今もって信じ難い思いであります。にもかかわらず、ここにいよいよ会長とお別れを申さなければならぬときがまいりました。

会長は大正○年○月○日のお生まれでまだ○○○才。これからも会社のため、社会のため、大所高所からご指導いただけると、当然のように信じておりましただけに、にわかなご逝去はまことに驚愕、痛恨の極みでございます。

会長は昭和○年○○○に入社され、警視庁キャップなど新聞記者の修羅場といわれる事件記者の分野で勇名をとどろかれました。○年○○○放送の開局にあたり、創業者○○○氏の懇請を受け、取締役○○○支社長に就任されました。その後、天賦の指導力と経営手腕によって○○○氏をたすけ、○○○年専務となられてからは、事実上の社長代行として当社の基礎づくりと発展のために、渾身の力をふるわれました。

○年社長に就任、さらに○○○年に会長と開局以来、当社の中枢にあつて言葉には尽くせぬ大きな功績と深い足跡を残されたのであります。今日の○○○放送は○○○○という方なしには存立しえなかつたと申しても、決して過言ではございません。

しかし、○○○会長の存在は○○○放送社内にとまるものではありませんでした。会長の天衣無縫の活躍は、放送界を越え、さらに国境を越えて広がっております。

この縦横の活躍は会長の鋭い直視力と視野の広さ、そして、驚くばかりに豊かな交友関係によって支えられていたのであります。すべて常人の遠く及ばざるところでありました。

昭和○年から○年間、○○○連盟副会長に就任、さらに○○○連盟としては異例の、アトランタ・オリンピックの報道成功に大いに貢献されました。

国際的な足跡はまことに広きに及び、とりわけ、日中友好促進の為、多くの番組の制作、放映と、相互交流を果たされました。

このような会長の業績により、平成○年、藍綬褒賞、○年には勲二等瑞宝章、受賞の栄に俗されました。そしてこのたび、従四位を追賜され、銀盃をあわせ賜りましたことは、まことに故あることと存じます。

私も一同は夏の陽のように燃える○○○会長の情熱と胆力にいくたびとも知れず、貴重な教訓を学びました。また、「バカヤロー」という激しい叫びのうしろ側に、実はやさしい、あたたかい、お心くばりのあることも、その都度、体験して参りました。再びその聲咳に接することが、もはやできないのだと、改めて思い当たるとき、ひしひしと淋しさがこみ上げてまいります。

しかし、○○○会長が当社と、私たち一人ひとりの心に残してゆかれた白熱のともし火は決して消えることはありません。

わたくしどもは会長のご遺志を継いで、○○○放送は、明るく、たくましく成長して参ります。役員、全社員を代表してここにお誓い申し上げます。

お別れに際し、ご霊前に深く頭を垂れ、ご冥福をお祈りし、尽きることなき感謝のまごころを捧げる次第であります。

○○○会長　どうか安らかにお眠り下さい。

平成○年○月○日

株式会社　○○○

葬儀委員長　○○○○